**｢進化は万能である｣人類・テクノロジー・宇宙の未来**

**マット・リドレー著　早川書房**

**第13章　政府の進化**

**（p334~350）担当：須藤**

1. **政府の進化　序説**

・映画からのイメージで19世紀のアメリカ西部において殺人は日常的。

→統治機関がなかったから。

・実際はまともな統治機関はなかったものの、無法地帯ではなく暴力はなかった。

→人々が独自の取り決め、私設執行官が執行、違反者は追放。

**・権力の政府独占がない中では私設の法執行官が出現。彼らの競争により繁栄する。**

**・慣行と法は押しつけられないところ（権力の政府独占）に現れる。**

・ロナルド＝コースが示した例→実際に法律は関係なし。内輪で問題解決（違法手段）。

・隣人との問題解決に警察や法廷に訴える→コミュニティの親善危うい。

・**政府は公共の秩序を守るための市民間の取り決め。外部から押しつけられる場合＜内部で出現**

1. **刑務所内統治の進化**

・アメリカにおける刑務所内の秩序の維持は、すべて国頼みではない。

→法は囚人達の間で自発的に生まれた（囚人の掟）→分権的な処罰あり→社会的協調を促し、社会的対立を弱める効果→秩序の確立

・1970年代、収監者の人種が多様化し囚人の掟を守られなくなる。

　→国家誕生前の社会と一致

・プリズン・ギャングの出現。

→いつの間にか出現/システムは分権的→このボトムアップの組織発生プロセスは進化であり、初歩的な政府の出現である

**・政府は用心棒代を取り立てる保護恐喝として始まり、人口が一定になると自然発生。**

1. **保護恐喝から政府への進化**

・政府はマフィアの保護恐喝の仕組みから成る。

→暴力の独占権を主張。市民を部外者から守る見返りに税金をはねる。

　→マフィアの保護恐喝は政府へと進化する過程にある。

・国家の特徴は暴力の独占。

　→独自の組織暴力団を抱え争う→アウグストゥスが出現/ローマ支配下の平和。

・現代人の国家に対するイメージ

　→善意に捉えている→暴漢集団が起源（ex様々な論者の説、国や軍の等）→国家が市民の自由を衰退に導いている。

1. **自由主義のレベラーズ**

・政府の信用。

→リベラルで進歩主義の人、老子やサンキュロットは政府を信用しなくなる。

　　政府は働く人を搾取するものという考え。

　　アクトン卿やマイケル・クラウドの言葉。

・レベラーズは政府に対して政治･経済･個人の完全な自由を求める。

→4人の運動参加者は「第三次人民協約」で要求（増税・貿易制限）。

1. **自由の助産師としての商業**

・17世紀終わりまでにヨーロッパに中央集権的な官僚制の政府ができる。

　→秩序を維持する目的→様々な革命→人民に説明責任を負う考え方生まれる。

・過激な進歩主義者達。

　→国家は自由と進歩のための機関と主張→当時の政府のあり方により理解されない

　→警察国家

1. **自由貿易と自由思想**

・自由貿易と自由思想の存在

* イギリスの奴隷廃止社会の基礎を築く。
* コブデン、万人のための平和と繁栄の両方を達成する上で考えられる最善の方法。

→結びつきを深め政府の出番を減らす

* コブデンの穀物法反対運動、関税保護反対運動が一般大衆や知識階級、有力な政治家を説得。
* 国際自由貿易条約取り決め→関税撤廃の連鎖をヨーロッパに→巨大な自由貿易地域
1. **コメント**

政府（取り決め）の多くは何の押しつけもないところに生まれるという考えには納得がいったのと同時に、政府の介入具合によってはコミュニティが危険にさらされることも理解できた。また、国家の形成や特徴を考える際に暴力が関係してくる点について、現在私たちが国家を考える際には出てくることは無い（出てくる人もいるだろう）と思うので新鮮だった。疑問点としてp346の一段落目はどこにかかってくるのだろうか。

**（ｐ350～ｐ362）　担当：佐名木**

＜語句の意味＞

右翼：（フランス革命後、議会で議長席から見て右方の席を占めたことから）保守派。国粋主義・ファシズムなどの立場。（リバタリアニズム・新自由主義Wikipediaより）

右派：右翼の党派。また、政党内部における保守派。

左翼：（フランス革命後、議会で議長席から見て左方の席を急進派ジャコバン党が占めたことから）急進派・社会主義・共産主義などの立場。左党。左派。

左派：左翼の党派。また、政党などの内部で革新的な立場をとる派。

※広辞苑第六版より

参考：日本においては「保守VS革新」から転じて「保守VSリベラル」といった政治対立の構図を表現する言葉となった。

※リベラルの定義や意味は使用される文脈によって異なるため、曖昧さを含む。

アメリカにおけるリベラル

→リベラリズム（自由主義）の中で政府による一定の介入をよしとする立場。アメリカにおける左翼。

※日本においては上記のアメリカにおけるリベラルをリベラリズムとしてきた（Wikipedia）

ファシズム：

国民を一元的に国家の元に統合し、国民生活を統制することによって国家の危機を克服することを唱える。（全体主義）（詳説世界史より）

社会主義：

生産手段の社会的所有を土台とする社会体制、およびその実現を目指す思想・運動。

共産主義：

私有財産制の否定と共有財産制の実現によって貧富の差をなくそうとする思想・運動。

自由主義（リベラリズム）：

近代資本主義の成立とともに、17～18世紀に現れた思想および運動。封建制・先生時に反対。経済活動の自由。議会制度を主張。

※日本では自由主義として表現してきた（Wikipedia）

**政府の反革命**

・ジョン・ロックから始まりコブリンで最高潮を迎えた自由主義国家は19世紀が進むにつれて衰退していく。

・ドイツの関税導入を皮切りにアメリカ、フランスと関税を設ける国が増えて保護貿易主義が復権していく。

・国家は自分たちの敵ではなく味方であるという見識が政治家たちに広がり国家主義や社会主義が台頭した。

→自由主義から反自由主義への転換は芸術の分野においても顕著にみられる。

自由主義支持：シラー、ゲーテ、バイロンetc

反自由主義：ヘンリック・イプセン、ギュスターヴ・フローベールetc

・19世紀前半には左派として扱われていたコブデン、ミル、スペンサーといった自由市場主義の人々は不当にも右派として決めつけられた。

・政治の目的は個人の自由を守ることから国家による計画と福祉に変わった。革命はトップダウンの事柄となり、プロレタリアートのリーダーによって指導されることとなった。

→自由主義は「中央集権国家の有益な効果を大いに信用する」ことを学んだ。

by A・V・ダイシー

・企業も政府の介入を受け入れた。無駄な競争をなくすのに都合がよかったためカルテルを結成しようとするか、あるいは政府の規制を受け入れた。

→実業界における模倣と細分化を終わらせるべき。計画と計画立案者、一つにまとまった構造が必要と主張。Byエドワード・ベラミー、ソースティン・ヴェブレン

・レーニンやスターリン（共産主義者）も科学的管理を行い、計画的に人員を調整し、巨大な資本を必要とするアメリカの大企業を称賛するようになった。

・1900年頃においては共産主義者、軍国主義者、資本主義者にとって政府は社会を設計するためのツールであり、政府の役割は計画立案者であるという認識だった。

→これらの認識はつくり上げられたのではなく、ただ出現した。by筆者

POINT

19世紀の前半には左翼として唱えられていた自由主義は19世紀後半には右翼（保守派）とみなされるようになり、新たな時代を切り開いていく考えは国家主義であるとされた。すなわち国家主義が左翼（改革派）とみなされるようになった。

自由主義国家（夜警国家）が政府を支持する勢力の拡大により衰退し、中央集権型の政府になっていった。←政府の反革命

**リベラル・ファシズム**

・ウッドロー・ウィルソン（大統領在任期間1913～1921）とその後任者のもとでアメリカは自由の無い場所になっていた。人種差別の激化、優生保護法、禁酒法など

→1930年代のニューディール政策はファシズムの模倣の部分もあった。ニューディール政策の支持者達は全体主義による経済と治安の改善をまねしたがっていた。

・ジョナ・ゴルドバーグは著書『リベラル・ファシズム』の中でファシズムは1930年代に多くの左派に支持されていたことを指摘。

→ファシズムは正しく理解すれば右翼の現象ではなく、今も昔も左翼の現象。

→ファシズムと共産主義は近縁関係にある

・今日の視点、あるいはコブデンらのリベラルな観点から考えると20世紀の様々な主義には大差がない。共産主義、結束主義、国粋主義、協調組合主義、保護貿易主義、テイラー主義、経済統制主義などはすべて基本的には計画を伴う中央集権体制である。

→ヒトラーらの主義の転換はこれで説明がつく

・ファシズムや共産主義は国家信仰であり、宗教が神を崇拝するように国家信仰においては政治指導者を崇拝している。政治指導者は全知、全能、不可謬を意識していると主張する。

→共産主義における指導者　マルクス、スターリン、カストロ、毛、金

POINT

アメリカはそもそもリベラリズムが土台の国であるため、より強固な自由を求めるのが米国流の「保守」である。リベラリズムの中で政府による一定の介入をよしとするのが米国のリベラルということになる。

本来は右翼の主義として捉えられるファシズムをアメリカのリベラル（政府の介入ありきの自由）の延長と捉えている。←リベラル・ファシズム

**自由至上主義の復活**

・WWⅡで司令統制国家は最高潮に達した。ほとんどの国がファシズム、共産主義、植民地主義の体制による完全な独裁主義路線で進んだ。民主主義が生き残ったわずかな国においても戦争のための緊急手段として包括的な中央計画が採用された。

・戦時の中央主権主義の元においても戦争が終わったら計画経済を撤廃しなければならないという主張があった。

→特に力強かったのはヒトラーとスターリン両方からの亡命者の声。彼らはナチスと共産党の全体主義は似ていると主張した。byハンナ・アレント、アイザリア・バーリンetc

→特に有名なのはフリードリヒ・ハイエクの意見

社会主義とファシズムには「手法と思想に根本的な類似点」がある。経済計画と国家管理は反自由主義という坂のてっぺんにあり、一歩間違えば独裁政治と抑圧と隷従になる。自由化への真の道は自由市場による個人主義。と主張。

・イギリスでは自由至上主義で急進派のアーネスト・ベン卿が生産手段の国有化を阻止。ドイツではルートヴィヒ・エアハルトが自身の主導権で食料の配給を廃止。

→自由至上主義の復活

**政府という神**

・自由主義的価値観が復活したにも関わらず、知識階級の大半はいまだに計画に基づいたワンパターンの考え方をしており、マシンとしての政府は完全無欠とみなされる。

→2011年のアメリカのGDP比における政府支出は41％まで増加した。

・政府の進化の次なるステージは国際化である。国際官僚制度の発展は現代の顕著な現象。

→EUなどよりも権力のある国際食品規格委員会、バーゼルを本拠地とする委員会、金融安定化理事会などの存在。

・ボトムアップ式の進化の駆動力も湧き起ろうとしている。

→イギリス政府による民間へのIT業務改革の依頼。「滝」プロジェクト。小さなプロジェクトからフィードバックを得て徐々に進化させる方式。

→壮大な計画ではなく小さなステップの積み重ねが重要である　by筆者

コメント：

章を通して暴力による安全保障によりボトムアップで生まれた政府がどんどん巨大化して現代では神に近い存在になっていることがわかった。

政府の進化が進んでいくにつれて国際的な官僚機関が形成されていくことに触れられていたが、アメリカではトランプが保護貿易を唱えているしEUではイギリスのブレグジットが話題になっており世界の政治情勢は再び国家主義、全体主義の方に傾きつつあるのではないかと懸念されている。筆者はこの状況をどう見ているのか気になった。